

色彩画家のヨーロッパ紀行

ヨーロッパの長期滞在の中で、三岸節子が描き出した数々の風景画。そこには各地の景色が華やかに、時には単色で表現されています。自ら色彩画家と語るほど、色彩にこだわりをもった節子。本展では色彩をキーワードに、行く先々で節子の目を魅了した風景を紹介し、節子が歩いたヨーロッパの旅をたどります。

念願のフランスへ

節子は画業初期には花や室内画、静物画といった室内を舞台とした油彩を手がけましたが、1954(昭和29)年、49歳のときにながく念願であった初渡欧を果たすと、そこで出会った数々の風景をデッサンに表現しました。節子自身、この渡欧が風景への初挑戦であったと振り返っています。滞在地は息子・黄太郎(1930-2009)のいるフランス・パリで、イタリア、スペイン、さらに南仏カーニュへ旅しています。

暫くのパリ滞在は安ホテルの一室住まいだったが、油絵を描く場所もなく、南仏カーニュに戸建ての家を借りて、ゆっくりと絵を描くことにする。(中略)
明るい陽光の下に繰り広げられるパステルカラーの風景と、海の紺碧の色、絵のモチーフに事欠かない。(注1)

節子の言葉には色彩が散りばめられ、異国の風景が節子の目に色鮮やかに映ったことがうかがえます。

二度目の渡欧と花とヴェネチア展

翌年帰国した節子は、愛国心から日本の原始美術である埴輪や土器、浅間山の鳥をメインモチーフとします。しかし、1968(昭和43)年には風景画へ再度挑戦することを目的に再び渡仏、黄太郎一家とともに南仏カーニュに定住を始めました。秋から冬にかけてはヴェネチアへ赴き、スケッチを重ねます。

1972(昭和47)年、パリの画廊から個展の誘いを受けた節子は、開催に向けた作品制作を開始。展覧会名を「花とヴェネチア」と決めました。

1973(昭和48)年68歳 7月12日(木)——
猛然と赤い絵に取り掛かる。ヴェニス赤のために私が滞欧作展のタイトルを「ヴェネチア」と名づけたのであるが、いつもこの面倒な赤はよけて、花や他の容易な作品に集中していたのである。ただし、もう何が何でも、ここ当分、赤のヴェネチアにかかりきる。この5枚が出来なければ展覧会の意味が失われる程に力をこめて、明日から描く。(注2)



三岸節子《大運河にて》1973年©MIGISHI

この個展に節子は、寒色を用いて冬のヴェネチアを描いた《霧》(No.10)などを出品しましたが、節子が特に描きたかった色は、《ヴェネチアの赤い壁》(No.25)などに見られるような熾烈な赤、“ヴェネチアン・レッド”でした。1974(昭和49)年、無事に個展が開催されると、異国の地にもかかわらず節子の風景画は高く評価されました。これを受け、節子は帰国を取りやめ、活動拠点をフランスに定めました。

パリでの個展開催はその後も続き、その度に節子は“絵になる場所”探しのため、ヨーロッパ各地を巡っていきます。

スペインそしてイタリア・シチリア島へ

1987(昭和62)年には、初渡欧時に見た白い家に題材を求め、スペインへ。しかし望むような景色には出会えず、モチーフ探しは難航しました。そんな中見つけたのが、アンダルシアの風景でした。抜けるような青い空を背景に、赤い屋根と白い壁の家々が立ち並ぶ景色は、色や構成、表現を変えて、いくつもの作品に描かれました(No.14,15)。

1988(昭和63)年、さらに節子はイタリア・シチリア島を回り、そこで出会った古代ギリシアの円形劇場をモチーフとします(No.29)。これらの風景画を集めた個展開催の翌年、1989(平成元)年には帰国。二度目の滞欧は20年間に及びました。

1984(昭和59)年79歳
巴里は冬が美しい。
葉をすべて去った黒い枝ばかり、灰色の空に突っ立っている。
私はこれが好きだ。(中略)
巴里は灰色の街である。

1986(昭和61)年81歳 8月28日(木)晴——
1ヵ月をスペインで暮らそうかと話す。
つまり私のあこがれの風景のひとつ、
白い家を描くためである。(注3)

1991(平成3)年86歳 1月9日(火)——
朝方になって見たフランスの夢は素晴らしかった。
出てくる色彩がうす紫と灰色と白だけの世界で、老いた女流画家が作品とともに表れるが、
絵もアトリエの環境も、この2つの色彩で何ともいえず繊細で美しかった。(注4)

帰国後の86歳の日記では、夢の中で見たフランスの風景がモノトーンの色彩で語られています。夢に見るほどに、訪れたヨーロッパの風景が色彩であふれていた節子。節子の目に映った各地の色彩風景を、作品を通して追体験してみてください。

一宮市三岸節子記念美術館 学芸員 大村菜生

(注1)三岸節子「旅へのいざない 三岸節子ヨーロッパデッサン集 1954-1989」求龍堂、1997年、10頁。

(注2)「生誕100年記念 三岸節子展 永遠の花を求めて」朝日新聞社、2005年、131頁。

(注3)前掲「生誕100年記念 三岸節子展」138頁。

(注4)前掲「生誕100年記念 三岸節子展」140頁。